

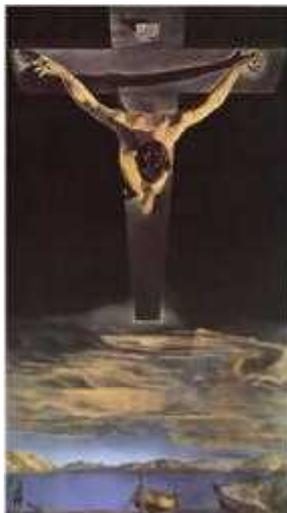
# 「主の言葉は滅びない」

(マルコ13:24-32)

挽地茂男

2019.6.2 日本基督教団千歳丘教会

マルコによる福音書13章の「小黙示録」が語る「世界の終わり」は「キリストの生涯の終わり」

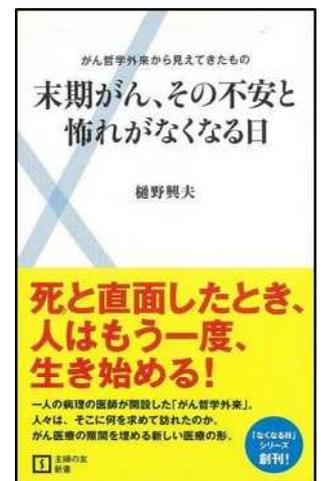


と遠景と近景を構成するように配置されています。そしてこれらの「終わり」がわたしたちの「人生の終わり」と三重に重ねられるとき、聖書の語る「終わり」のメッセージの深みに達します。世界に終わりがあるように、キリスト

の生涯に終わりがあり、わたしたちの人生に終わりがあります。「終わりに向かって生きる」あるいは「終わりから今を生きる」という人のあり方を、先日来ご紹介している樋野興夫先生の本や映画ははっきりと示してくれます。

樋野先生の言葉にこのような言葉があります。「『がん哲学外来』

での経験でわかったこのひとつに、話を聞くだけでは、患者さんを元気にできないということがあります。患者さんは、自分の言いたいことをひととおり声に出してしゃべってしまえば、心が洗われたようになり、気分がすっきりするようです。もちろん、それだけでも意義のあることです。患者さんにとって、『聞きじょうず』な人の存在は、一種の救いにもなります。ところが、これだけでは根本的な解決には向かいません。リセットはされても、心の中のシステム、考え方の枠組みが変わったわけではありません。だから、たいていは、家に帰って、ある程度の時間が経てば、また不安が頭をもたげ、同じようなことに悩み、同じような苦しみを味わうようです。……自分で考えを組み立てるといふ部分が大切だと思っています。人から与えられるのは、答えではなくて、あくまでもヒントであり、きっかけです。そこから自分の頭で解決策を模索する方



が、本当の解決に結びつくのではないのでしょうか」(『末期がん、



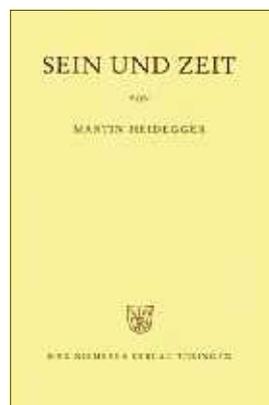
その不安と怖れがなくなる日』p.162-63)。患者さんが、周囲の家族や医師の協力を得て、自分の頭で考えるの

が樋野先生が言うておられる「がん哲学」なのです。「哲学」といっても何か難しい理論を学ぶということではありません。先生の本を読めば分かりますが、最終的には素直に考えて、人として当たり前前のことを素直に受け止めていく、ということなのです。基本的には人と人との間で交わされる対話の中で、糸口が見つかっていくのです。先生の言葉は、そのような人として当たり前前のことについて、たくさんの気づきを与えてくれます。もちろん専門のがんについては、専門的にしかも分かりやすくきっちりと教えてくださいます。がんの患者さんやそのご家族、それにがんと直接に関係を持たない人も加えて、がんの問題を真剣に考え、知恵深く生きるための営みが、名前は厳めしいですが、そ

れが「がん哲学」なのです。

樋野先生は「がんは人を哲学者にする」(同書、p.68)と述べておられます。がんの経験が、いかに生きるかを真剣に考えるきっかけを与えてくれるからです。またこうも言います。「ところが、がん患者さんを見ていると、人が変わったように見えることがよくあります。たいていは、良い方向へ変わるのです」(p.84)。「社会的地位や貧富などは無関係です。どんな偉い人、どんなにお金持ちでも、がんという病気の前では、ひとりの人間に過ぎません」(p.87)。「…自分を見つめ、がんを自分の向き合うテーマとする、その覚悟ができたとき、人は劇的に変わります。がんをきっかけに、みずから大きく変える——この自己変革のドラマは、じつに感動的なものです」(p.85)と語っておられます。

樋野先生の言うておられることは、実は、マルチン・ハイデガーの言うていること(哲学)と重なってまいります(ハイデガー『存在と時間』)。ハイデガーは人



間を「死への存在」〈Sein zum Tode〉と定義します。しかし人間は、ふだんは、「自分が死ぬべき存在である」という事実は無自覚、むしろその事実から逃げている、とハイデガーは言います。樋野先生の言い方では、「逃げてる」などときつい表現では言わずに、もう少し柔らかい言い方になります。例えばこうです「人間は必ず死にます。病気にならなくても、120歳くらいまで生きて必ず死ぬ。ところが、ここが面白いところなのですが、自分が明日死ぬとは決して思いません。亡くなった方の病理解剖をいくらやっても、自分が明日はこうなるとは絶対に思いません。これは、がんで亡くなっていく患者を日々見送っている臨床医や看護師にしても同じです。人間はいつまでもいき



られるという錯覚を起こす動物なのです。ずいぶん前になりましたが、あのきんさん・ぎんさんが100歳の時にインタビューを受けたときの事です。『今後何をしますか?』とい

う質問に、『貯金します。老後のために』と答えました…」（『がん哲学外来入門』p.156）。樋野先生の言い方では「人間はいつまでもいきられるという錯覚を起こす動物なのです」となるのですが、ハイデガーでは「死ぬという事実から逃げている」（死からの逃走）という、少し厳しい把握の仕方、きつい表現として語られます。せっかくですから、ハイデガーの鋭角的な議論も参考のためにご紹介しておきたいと思います。

ちょっとがんの話に戻りますが、がんは二人に一人がかかる病気であり、そのうちの50%が治る病気だと言われています。もし早期発見率が上がってくれば、そのうち70%に達するとも言われています。しかしそう言われても、また「初期のがんですから90%は直ります」と言われても、あとの10%の不安に心はかき乱されるのです。「がん」には、つねに死の不安(影)がつきまといます。しかし、がんの患者さんだけが死ぬわけではありません。がんの患者さんでなくても、人間は、みな、必ず死ぬべき存在なのです。どれほど自分を言いくるめてみても、

みな、必ず死ぬべき存在なのです。しかし健康に恵まれているときには、分かっているにもかかわらず考えないのです。むしろ人間は——ハイデガーに言わせると——それを直視しないで、自分が「死ぬという事実から逃げている」というのです。ハイデガーは、それを説明するために Man（人）というドイツ語の男性名詞に、das という中性形の冠詞をつけて〈人（das Man）〉という用語を造りました。その〈人〉は、とりあえず他の人と同じものの見方や意見を持っていると安心するのです。〈人〉は、他人との〈おしゃべり〉の中で共通の（公共的な）意見を共有するようになります、そして共有している限りは安心しています。



〈人〉と同じであれば、とりあえずは安心なのです。〈人〉はさまざまな（公共的な）〈おしゃべり〉を通して得られる、通念や常識によって安心しています。そしてその安心は、

ついには「〈人〉は死ぬ」といっても、揺るがないものになるのです。人は驚かなくなるのです。むしろ笑って「人は死ぬもんですよ」などと口にするまでになります。

〈死ぬこと〉は自分にとって大問題であるはずなのに、「人は死ぬもんですよ」と一般論にながせるのです。まるで、自分は死なないとも思っているかのようです。

「死ぬ」ということは自分のことのように思えないで、「人は死ぬんであって」、「死ぬこと」が〈人ごと〉になっていくのです。しかしがんの宣告は、〈人ごと〉に終止符を打つのです。〈人ごと〉ではなくなるのです。自分が死ぬのです。人は狼狽し、また恐怖します。「人は死ぬもんですよ」と軽くは言えなくなるのです。

しかしまた、人は、その狼狽や恐怖から抜け出て「自分の人生の終わりを静かに受け止める」境地にまで達することができるのです。そして自分の終わりを静かに受け止めた人こそが、主体的・能動的に人生を生き始めるのです。人生の断捨離、どうでもいいものを捨てて、優先順位を徹底的に変更することによって、自分の人生

で最も大切にすべきなものに向かって能動的に働きかけを開始するのはです。そのとき彼は、「病気ではあっても病人ではなくなるのです。」しかし、先程申しましたように、がんの患者さんだけが死ぬわけではありません。すべての人が死ぬのです。ハイデガーは、自分の人生に限りあることを「知れ」というのです。そして限りある時を主体的・能動的に生きよ、と言うのです。そうでなければ、人生は人ごとのように、本来の自分の求めるあり方からずれたまま過ぎていく、とハイデガーは語ります。死を見つめること。死からの逃走(逃げること)から反転して、しっかりと死に向き合うとき、生きるという(生への)衝動が強くなっていきます。死の不安と恐怖という影が濃ければ濃いほど、その影を造り出す日差しが強いように、「死」の対極にある「生」(生きているということ)の恵みと豊かさや可能性が自覚されていくと語ります。その時、人は〈おしゃべり〉からえられる気休めに時間を奪われるのではなく、静かに、真に自分にとって意義ある生に向かって行くのです。

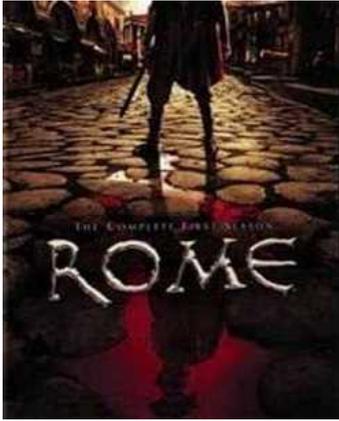
聖書は終りを語ります。死を語ります。人間の人生の終りを語ります。また世界の終りを語ります。そして主イエス・キリストの生涯の終わりを語ります。主イエスは自分の生涯の終わりを見つめていました。そして世界の終りを見つめていました。そして彼はこう語ったのです。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(v.31)。そしてその主イエスの生命は、一つの大切なことに費やされていったのです。

今日の「小黙示録」は、世界の終わりについて露骨に語ります。13章の24-27節。

13:24 「それらの日には、このような

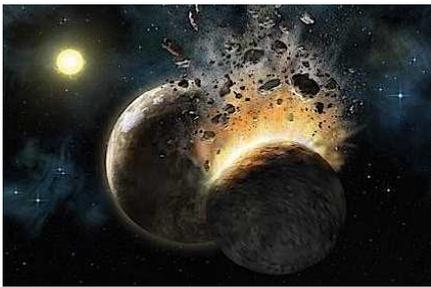


苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、13:25 星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。13:26 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。13:27 そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」



黙示録に特徴的な天変地異、天体における異象が描かれます。ここで言われている「このような苦難」とは、

すでに5 - 2 3 節で語られた苦難のことです。「憎むべき破壊者」(v. 14)が登場するこれらの苦難を第1の苦難と呼んでおきたいと思えます。このような第1の苦難の後に起こる天変地異（天体の異変）



が語られます。最終的な人の子の来臨をともなう

第2の苦難です。2 4 - 2 5 節では、(1)太陽が暗くなり、(2)月が光を放たなくなる、と言われています。宇宙的終末（大破壊）の始まりです。さらに(3)星が空から落ち、(4)天体が揺り動かされます。太陽の光なしで生命を維持できる生命体は地球上に存在しません。つまり生命活動が不可能になるのです。

これらの「主の日」、つまり終末の描写は旧約聖書のイメージを

継承しています。ヨエル2章10 - 11 節にこう書かれています。

「ヨエ2:10 その(主の日の)前に、地はおののき、天は震える。太陽も月も暗くなり、星も光を失う。

2:11 主はその軍勢の前で声をとどろかされる。その陣営は甚だ大きく／御言葉を実現される方は力強い。主の日は大いなる日で、甚だ恐ろしい。誰がその日に耐えよう。」

さらにイザヤ書13章9 - 10 節。「イザ13:9 見よ、主の

日が来る／残忍な、怒りと憤りの日が。大地を荒廃させ／そこから罪人を絶つために。13:10 天のもろもろの星とその星座は光を放たず／太陽は昇っても闇に閉ざされ／月も光を輝かさない。」

そして「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」(v. 26)のです。



これも旧約聖書のイメージを引き継ぎます。ダニエル書7章13 - 14 節。「ダニ7:13 夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人



の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」(神)の前に来て、そのもとに進み 7:14 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」

そして天使が遣わされて、「地の果てから天の果てまで…選ばれた人たち(τοὺς ἐκλεκτοὺς)を四方から呼び集め」ます(v.27)。これも旧約聖書のイメージの継承です。申命記 30 章 3 - 4 節。「申30:3 あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、あなたの神、主が追い散らされたすべての民の中から再び集めてくださる。30:4 たとえ天の果てに追いやられたとしても、あなたの神、主はあなたを集め、そこから連れ戻される。〔「四方から」(ἐκ τῶν τεσσάρων ἀνέμων)という表現も、旧約聖書のゼカリヤ書 2 章 10 節の 70 人訳ギリシア語聖書(LXX)のイメージの再現です。〕黙示録に現れるイメージの多くは、旧約聖書のイメージの再現です。新約時代のキリスト者は、旧約聖書を神の言葉として、行き止まり(どんずまり)のような時代にあって、

「温故知新」故きを温ねて新しきを知る、ならぬ「温故創新」故きを温ねて新しきを創り出す、新しい未来を切り開いていったのです。

主イエスは、「いちじくの木」からも、教えを学べと言われます。28 - 31 節。

13:28 「いちじくの木から教えを学びなさい。



枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。13:29 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。13:30 はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。13:31 天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」いちじくの木から学ぶべき第1のことは、いちじくの木 of 生育状況から、季節を見分けることができるように、つまり「枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる」ように、時代状況の変化を見極めて、今がどのような時代なのかを自覚するように、と勧めているのです。



いちじくの木から学ぶべきことは、もう一つあります。マルコの11章12-25節に出てきた、あの「枯れたいちじくの木です」。この11章12-25節には、マルコのサンドイッチ技法が使われていて、マルコは「いちじくの木」の話を2つに割って、その間に「宮清め」の話をサンドイッチにしています。12-14節で、主イエスがいちじくに実がついていないので、そのいちじくの木を呪います。ついで15-19節に宮清めがはさまれ、主イエスが神殿から商人たちを追い出します。そして20-25節で、次の朝その前を通ると呪われたいちじくの木は枯れていました。そして呪われて「枯れてしまっ）たいちじくの木」の教訓が語られます。主イエスにとっての「いちじく」と、主イエスに

とっての「神殿」が二重にして語られます。主イエスがロバに乗ってエルサレムに凱旋入城し、そして訪れた神殿は、本来の礼拝の場所としての機能を失っていたのでした。「全ての国民の祈りの家」呼ばれるべき神殿は、「強盗の巣」と化していたのでした。そこは祭司階級の人々と神殿商人が造り出した神殿経済共同体のマーケットとなっていたのでした。その日主イエスは、神殿商人たちを、神殿から追い出してしまわれたのでした。



イエスの宮清め

主イエスの「いちじくの木」への呪いは、エルサレム神殿批判を象徴します。実がなっておらず、**葉だけ茂ったいちじくの木** [=エルサレム神殿]。神殿の建物や祭儀や運営の表面的な繁栄〔虚栄〕を誇示するエルサレム神殿。葉によって覆われた部分（葉が覆い隠しているもの）を、主イエスはエルサレムの宗教指導者との議論を通して暴きます。そこに隠されていたのは、神殿利権に絡む、人間の強欲、人間の罪、神への反逆以外の何者でもありませんでした。

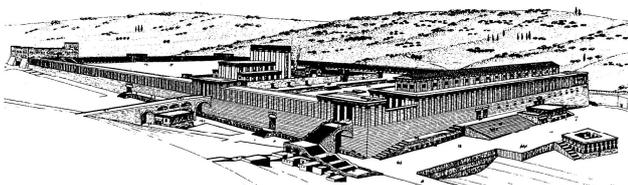
いちじくの木物語Ⅰ
宮 清 め
いちじくの木物語Ⅱ

それは、エデンの園で罪を犯したアダムとエヴァがいちじくの葉で隠したのと同じ、罪を犯した人間の裸の姿でした。創世記3章6-7節。「創3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」罪の結果見えるようになったものは、自分たちの裸の姿—しかも隠すべきものとして見えた姿—だったのです。「いちじくの葉をつづり合わせ」て覆ったものの、葉の下には、裸の人間がいるだけに過ぎないのです。エルサレム神殿が見せるその表面的な成功と繁栄、その宗教性は、実〔[じつ]とも読める〕のないいちじくと同じなのです。それは（霊的な）実〔じつ〕のないエルサレム神殿を象徴しているのです。主イエスがいち

じくの木に近づくと実がなくなっていました。同じように、エルサレム神殿に近づくと実がなくなかったのです。神殿の現実（神殿の今の実〔現実という言葉「現れた」「実」と書くんですね〕）とは何か。それは神殿商人と神殿貴族がつくり出した神殿経済共同体。神殿に献げる犠牲獣（牛や羊や鳩）を売る商人と、神殿に献げるための肖像のついていない貨幣に両替をする両替商、それらの神殿商人を取り仕切る祭司集団。彼らは神殿を「強盗の巣」にしてしまった、と主イエスは批判します。

宮清めの後、神殿経済共同体の首脳部が動き出します。サンヘドリンの重鎮たちが、主イエスを議論で封じ込めようと近づいてきました。しかしその議論は真理を求める議論ではありませんでした。神殿境内にうずまいているのは自己防衛としての議論でしかなかったのです。あるいは議論という名の不信仰でしかなかったのです。そして神殿境内の論争物語の最後に配置された〈やもめの献げ物〉の物語は、神殿（神の御前）にいる者の最も相応しいあり方を印象的に教えるのです。つまり、信仰

ヘロデ大王の神殿の丘



は論争する力に現れるのではなく、神への献身に現れるのです。

苦難はキリスト者に迫ってきます。第1の苦難の後に、第2の苦



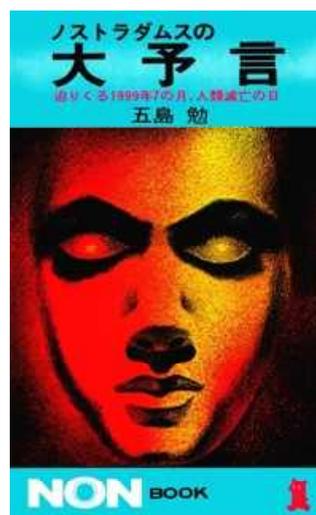
難が襲います。主イエスは苦難の中にいる者に語りかけ

ます。これらのことが起こる時、「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」(v.29)。また「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない」(v.30)と言われます。しかし、やがて苦難の時代は必ず過ぎ去るのです。わたしたちが信頼すべきものが明言されます。主のみ言葉です。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(v.30)。終末的混乱の中で信頼すべきものは、み言葉なのです。旧約聖書の神のみ言葉、主イエスのみ言葉、聖霊を通して今も語られるみ言葉、み言葉こそ、わたしたちのよって立つべき所なのです。

終わりの時が来ます。しかし、そのその日、その時を誰も知りません。32節。「13:32 その日、その時は、だれも知らない。天使

たちも子も知らない。父だけがご存じである。」「父なる神以外は誰も知らない」という主イエスのみ言葉を信じましょう。

しかし、その日、その時を予告する宗教や人々がいます。一時期話題になったのが、「ノストラダムスの大予言」でした。フランスの医師・占星術師ノストラダムスが著した『予言集』(初版1555年)について、彼の伝記や逸話を交えて解釈するという体裁をとった、五島勉の『ノストラダムスの大予言』(祥伝社、1973年)が世間を騒がせました。この五島勉の本は、1973年に発行され、1999年7の月に人類が滅亡するという解釈を掲載します。そして公害問題などで将来に対する不安を抱えていた当時の日本で、ベストセラーになります。1974年には、東宝でこれを原作にした文部省推薦の同



名の映画も制作公開され、1974年の邦画部門の興行収入第2位を記録します。しかし予告された

1999年は、何事もなく過ぎ去ってしまいました。

宗教ではエホバの証人（ものみの塔）が、繰り返し終末を発表しました。第1回目は1914年に「諸国民の時は終わる」と発表したのです。「ヨーロッパの目下の（第一次）大戦は聖書のハルマゲドンの開始だ」と言ったのです。しかし、終わりは来ませんでした。ついで、第2回目は1925年。「1925年に旧約聖書の聖徒たちが完全な人間として、目に見える形で復活する」と終末を告げたのです。しかし、やはり終わりは来ませんでした。そして懲りずに第3回目は1975年。「秋にはキリストの千年王国が始まる」と



公表したのでした。しかし何事もなく過ぎ去ってしまいました。

「その日、その時は、父なる神以外は誰も知らない」という主イエスのみ言葉を信じましょう。主イエスは「終末」に対するの正しいあり方を、目を覚まして待つことと教えてくださいました。13章33節。「13:33気をつけて〈ブ

レペテ〉、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」

「終りだ、終りだ」と騒ぎ立てる人たちに対して、ペトロの手紙一章7-11が教えてくれる、終末の具体的な生活のあり方は、なんと穏やかなのでしょうか。終わりは恐怖ではありません。新しいときの始まりでもあるのです。がんと向き合う患者さんたちが獲得する心の静けさと、自分の終りを見定めた主イエスと、世界の終りを心に据えて生きる人たちの、静かでしっかりとした佇まいが、はっきりと見えてまいります。今日もペトロの手紙を読んで終りに致しましょう。

4:7 万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。4:8 何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。4:9 不平を言わずにもてなし合いなさい。4:10 あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。4:11 語る者は、神の言葉を語る

にふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力が、世々限りなく神にありますように、アーメン。

今のかけがえのない時を、思慮深く、祈り深く、互いに仕え合いながら、主と共に歩んでまいりましょう。新しい一週間の主のお守りを祈ります。祈りましょう。

2019.6.2 日本基督教団千歳丘教会



13:24 「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、

13:25 星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。

13:26 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。

13:27 そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

13:28 「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。

13:29 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。

13:30 はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。

13:31 天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

13:32 「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。

13:24 Ἡμετέρας μετὰ τὴν θλίψιν ἐκείνην ὁ

ἥλιος σκοτισθήσεται, καὶ ἡ σελήνη οὐ δώσει τὸ φέγγος αὐτῆς,

13:25 καὶ οἱ ἀστέρες ἔσονται ἐκ τοῦ οὐρανοῦ πίπτοντες, καὶ αἱ δυνάμεις αἱ ἐν τοῖς οὐρανοῖς σαλευθήσονται.

13:26 καὶ τότε ὄψονται τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἐρχόμενον ἐν νεφέλαις μετὰ δυνάμεως πολλῆς καὶ δόξης.

13:27 καὶ τότε ἀποστελεῖ τοὺς ἀγγέλους καὶ ἐπισυνάξει τοὺς ἐκλεκτοὺς (αὐτοῦ) ἐκ τῶν τεσσάρων ἀνέμων ἀπ' ἄκρου γῆς ἕως ἄκρου οὐρανοῦ.

13:28 Ἀπὸ δὲ τῆς συκῆς μάθετε τὴν παραβολήν· ὅταν ἤδη ὁ κλάδος αὐτῆς ἀπαλὸς γένηται καὶ ἐκφύη τὰ φύλλα, γινώσκετε ὅτι ἐγγὺς τὸ θέρος ἐστίν·

13:29 οὕτως καὶ ὑμεῖς, ὅταν ἴδητε ταῦτα γινόμενα, γινώσκετε ὅτι ἐγγὺς ἐστὶν ἐπὶ θύραις.

13:30 ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι οὐ μὴ παρέλθῃ ἡ γενεὰ αὕτη μέχρις οὗ ταῦτα πάντα γένηται.

13:31 ὁ οὐρανὸς καὶ ἡ γῆ παρελεύσονται, οἱ δὲ λόγοι μου οὐ μὴ παρελεύσονται.

13:32 Περὶ δὲ τῆς ἡμέρας ἐκείνης ἢ τῆς ὥρας οὐδεὶς οἶδεν, οὐδὲ οἱ ἄγγελοι ἐν οὐρανῷ οὐδὲ ὁ υἱός, εἰ μὴ ὁ πατήρ.